

戦前期における中等学校文化に関する研究

—— 岡山県を事例にして (II) ——

渡 辺 一 弘

中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第46巻 第一部 別刷

Reprinted from ANNALS OF EDUCATIONAL RESEARCH

VOL.46 Part 1, 2000

戦前期における中等学校文化に関する研究

—— 岡山県を事例にして (II) ——

渡辺一弘
(広島大学大学院)

I. 研究の目的

当時、市内の普通科は県立では朝日と操山だけでしたから、何かにつけて操山を意識し、比較したものでした。校風は、操山の軟派に対し朝日は硬派だと考えられていました¹⁾。

その頃、二中、一女という風潮がまだ完全には脱色されていなかったけれども、「操山高校」としての校風が順次でき上がりつつあるときだったと思う。

大学合格率のみが高校のパロメーターとされていたとき、全員クラブ活動強制入部、全校マラソン、クラス旅行、あるいは体育祭、文化祭など、学業以外の活動を通じて「人間」の育成に重点をおいた方針は、ライバル「朝日高校」の校風と対照的であった²⁾。

これらの文章は、旧制中学・高等女学校の伝統をもつ岡山市内の二つの高校の校友会誌、学校史から、「校風」についての記述を昭和30年代前半の卒業生の回想より引用したものである。当時、岡山学区は岡山朝日高校(岡山一中、岡山二女の前身)と岡山操山高校(岡山二中、岡山一女の前身)の普通科二校による総合選抜制であった。入学者は、成績・通学距離が公平になるように配分されていたが、「校風」の違いが存在することは十分に伺える。このような違いはどのようにして生じているのであろうか。

黄(1998)は、福岡県の藩校の伝統をもつ地域のエリート高校において、生徒達がどのように文化様式を正統化し、身体化していくかを、同窓会との関連から学校をみるという新たな視点から、エスノグラフィーの手法を用いて明らかにしたが、果たして大正期創設の後発の旧制中学の伝統をもつ地域の進学校においても、生徒達は文化様式を正統化し、身体化しているであろうか。明治期に創設の先発の旧制中学に対してのサバイバル戦略として、独自の教育方針を掲げたであろう後発校の学校文化(校風)を問題にすることは、旧制の学校を引き継いだ新制高校における学校文化の形成

に果たした機能をみるうえで意義がある。

以上の問題関心の下、筆者は昨年の本紀要において岡山朝日高校、岡山操山高校両校の前身校の旧制中学に焦点を当て、学校の沿革史資料を中心とした記述資料を用いて、大正期創設の岡山二中の学校文化(校風)を明治期創設の岡山一中の学校文化(校風)と比較検討して以下の点を明らかにした。

1. 教育方針、制帽の採用過程、上級学校進学率など、岡山二中は開校当初から岡山一中を意識していた。
2. 校友会組織の成立状況や軍事教練に見られるように、岡山二中は学校の管理が厳しくスパルタ的であった。岡山一中は良く言えばリベラル、悪く言えば生徒が自由勝手であった。
3. 岡山二中は全人教育的で大らかな雰囲気があった。岡山一中はエリート的で冷たい雰囲気があった。
4. 昭和初期の上級学校進学状況は、私立専門学校を除くと岡山一中が県下第1位で、次が岡山二中であった。

本稿は前回の報告の第2報である。今回の報告においても、引き続き前回の報告と同様に、大正期(主に中期以降)創設の旧制中学の学校文化(校風)を明らかにして、それがどのように形成され発展していったかということを検討することを目的とする。なお今回の報告では、前回の分析の一部補足並びに再分析も含む。

II. 事例研究の対象

本稿では岡山一中と岡山二中を分析対象とした。岡山一中(正式名称は岡山県第一岡山中学)は、1874(明治7)年6月に教員養成の目的で設立された温知学校に中学生養成所を併置したことが濫觴である。その後、岡山中学、岡山県尋常中学、岡山県岡山中学などと何度か改称して、岡山二中の設置に伴い、1921(大正10)年3月に岡山一中と改称した。中国地方では最初の公

立中学である。戦後学制改革により「岡山県立岡山第一高等学校」と校名改称し、1949(昭和24)年8月「岡山県立岡山第二女子高等学校」(旧岡山二女)と高校再編成により両校統合され、岡山県立岡山朝日高等学校となる³⁾。

岡山二中(正式名称は岡山県第二岡山中学)は、1921(大正10)年4月開校。初代校長には、岡山県視学武居魁助が就任し、以後1945(昭和20)年3月まで25年間もの長期にわたって校長を務めた。戦後学制改革により「岡山県立岡山第二高等学校」と校名改称し、1949(昭和24)年8月「岡山県立岡山第一女子高等学校」(旧岡山一女)と高校再編成により両校統合され、岡山県立岡山操山高等学校となる。

前回の報告でも示したが、岡山二中開校時(大正10年)直前、県下の県立中学は岡山(後の岡山一中)・津山・高梁・矢掛の4校、私立中学は関西・関谷・金川・金光・天城・興譲館・岡山饗の7校の計11校であった。大正9年の入学志願者100に対する入学者は、公立32.53、私立58.30、全体で44.45という状況で、特に人口の多い都市部の岡山中学では、志願者100に対して入学者は17.38という非常に厳しい状況であった。このような情勢の下に県立中学増設の機運が高まり、大正10年岡山二中が開校した⁴⁾。

III. 分析方法と分析資料

(1) 分析方法

分析方法は、前回の報告と同様に『新教育社会学辞典』の「学校文化」の定義に従い、学校文化を構成する、1)物質的要素(学校建築、衣服等)、2)行動的要素(行事、生徒活動等)、3)観念的要素(教師ないし生徒集団の規範、価値観等)の三要素⁵⁾に依拠し、これらを通して学校の伝統がいかんにか保持され継承されていったか、ということを中心に示した分析資料を中心に、岡山二中の学校文化を岡山一中の学校文化と比較検討していく。

具体的には、1.物質的要素：衣服(制服、制帽)、寄宿舎、2.行動的要素：修学旅行・遠足・臨海学校、3.観念的要素：学校の教育方針、生徒の価値観・態度、を分析する。これらを、岡山二中開校(大正10年)の大正後期以降の両校関係者の記述資料の回想を中心に比較検討する形で分析する。なお物質的要素については、前回の報告の一部補足並びに再分析も含む。また観念的要素については、前回と同じ分析枠組みであるが新たな資料を用いて、岡山一中側からの分析を中心に行う。

(2) 分析資料

学校関係の分析資料は、以下のものを用いる。

〈岡山一中関係〉

岡山県立岡山朝日高等学校 1984,『回想による110年史 鳥城』第140号, 1994,『岡山県立岡山朝日高等学校 写された120年』,各年度,『鳥城』。岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室 各年度,『岡山朝日高等学校 教育史資料』。岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 2000,『岡山朝日高等学校沿革年表』。後神俊文 1988,『旧制中学・新制高校角帽制定事情』『岡山中学事物起源覚書』11-21頁。國光久彦編1995,『岡山一中第63回卒五十周年記念鳥有会誌』。

〈岡山二中関係〉

岡山県第二岡山中学校校友会 1933,『交友』第十号, 1940,『交友』第十七号。創立三十周年祝賀会 1950,『創立三十年史』岡山県第二岡山中学校・岡山県立岡山第二高等学校。創立七十年史編集委員会 1969,『創立七十年史』,創立九十周年記念事業実行委員会 1989,『創立九十周年記念誌』,創立百年史編集委員会 1999,『創立百年史』,各年度,『操山論叢』岡山県立岡山操山高等学校。岡山県第二岡山中学校第十九期会 1984,『岡山県第二岡山中学校卒業四十周年記念誌』。岡山二中二期同期会 1998,『五十年後の卒業アルバム-岡山二中二期卒業記念-』。

IV. 分析結果と考察

1. 物質的な要素について

〈衣服(制服、制帽)〉

表1 岡山一中と岡山二中の服装の比較(大正末から昭和初期)

	制帽	制服(上着)	制服(ズボン)
岡山一中	角帽	ゲートル有り, 夏冬ともコンサージ, 7つボタン	前はポケット無し, 後ろは有り
岡山二中	角帽(白線をフチ取ったもの)	ゲートルなし, 夏服は霜降り, 5つボタン	ポケット無し(当初)

出典：渡辺(1999)227頁より転載、一部訂正

表1は、岡山一中と岡山二中(以下「一中」「二中」と略記)の服装の比較をまとめたものである。先ず注目したいのは、両校の制帽が角帽であるということである。当時中学での角帽は珍しく⁶⁾、また『広辞苑』によると、角帽は多く大学生の制帽とするところから、大学生の俗称としても使われるという。角帽は学校のプレスティージの高さを示していたと考えられる。一中の角帽採用については、角帽すなわちスクエア・

キャップの“スクエア”あるいは“フェア・アンド・スクエア”に品行方正とか公明正大とかの意味があることから、そうした意味を寓せしめたのだと言い伝えられている⁷⁾。また注目する点としては、明治20年に制服とともに角帽を制定したのが一中の校友会である「尚志会」であったということである。生徒は大学・大学予備門(東大の前身)にあやかって角帽を選んだという⁸⁾。一中の角帽については、七つボタンの制服と並んで以下のようにあこがれであり誇りであったという回想が多い。

「恐らく“角帽に七つボタン”は日本國中唯一だったろう。どれほど小学生のあこがれの的となったことだろう」(亀山相次(大正8～12年在職)岡山県立岡山朝日高等学校 1984, 36頁)

「七つボタンの制服、角帽に桜の花柄で「中」の字を囲んだ帽章も他校の服装とは際立って違い、一中生の誇りを意識させるに役立った」(戸川大六(昭和10年卒) 同上 59頁)

「天下の三中⁹⁾の一ツだという誇りは角帽(我々の学年から戦闘帽になって残念だったが)と共に生徒の心に自信と情熱を与え、また数多くの思い出と共に人としての情操をも蓄えさせてくれた」(F・T(昭和20年卒)國光久彦編 1995, 51頁)

二中の角帽採用については、以下のようないくつかの経緯があるという。

「当初二中の初代校長武居は丸帽にしたい考えであったが、当時の父兄が「丸帽だったら子供を二中に入れない」というので、やむなく角帽にしたとのことである」¹⁰⁾

「昔から一中は中学では珍しい角帽であった。二中が出来るとき、二中もやはり角帽にしたいということだったが、同じ角帽ではまざらわしいというので、角帽に白線をフチ取ったものが採用されたのだと聞いている」(Y・K(昭和3年卒)創立七十年史編集委員会 1969, 235-236頁)

この角帽への憧れについては、二中においても一中と同様の回想がある。

「白線のある角帽はあこがれの的であった。入学が許可されると早速帽子を買って貰い、夜寝る時には枕

もとにおいて寝た」(香取 武(昭和6年卒)創立三十周年祝賀会 1950, 56頁)

「合格の発表を見たその晩、忙しい母を無理矢理に連れ出して、憧れの白線あざやかに光る角帽を買いに行く。(中略)光る帽子に輝く童顔、元気に登校した新入生の私は、何の思考も自制もなく、唯有頂天だった」(浅野忠市(昭和16年卒)同上 60頁)

制服については一中は、七つボタンで丈の長いものである。これは非常に珍しいもので明治38年4月から昭和14年入学生まで採用された¹¹⁾。この七つボタンは先に示した回想から、角帽とセットで一中の象徴であったことがわかる。ゲートルは、大正の終わり頃に、兵科教練が厳しくなって用いるようになった¹²⁾。また真冬でも外套はもちろん襟巻きも手袋も許可されず、ポケットに手をつっこむことも禁止だったという¹³⁾。冬の寒い時期に、生徒がズボンの後ろポケットに手を入れるのを、一中生の品位をおとす、という理由から教頭が朝の朝礼で小言をいうことがあったという¹⁴⁾。

一方二中の制服は五つボタンであるが、ズボンには当初ポケットなかった。二中がズボンにポケットを作ることを禁じたのは、「手を入れて不善をなす」という配慮からしかなかった¹⁵⁾が、後に生徒の姿勢態度の点と特別のある理由で、右後に唯一ポケットを開けることに決まった¹⁶⁾とのことである。二中は規律がきびしく始終服装検査をされ¹⁷⁾、冬でもオーバー、手袋を禁止¹⁸⁾で、一中とは異なり、かなりスパルダ的に、質実剛健の校風を作ろうとしたことが伺える。

〈寄宿舎〉

上りもつて 藤 しく

表2 岡山一中と岡山二中の寄宿舎の比較

	構成	宿舎	特色・行事
岡山一中	1室4, 5人で5年が室長, 舎監3人, 昭和2年に廃止	南舎と北舎(約60人)があったが、南舎は後の初期の二中に	コンパ, 潮干狩り, 月見, ヤケイ(夜刑?)
岡山二中	舎監4人(常任2人)	東京に1, 2年約50人, 西寮に3年以上約60人	スキ焼き会, 一日遠足, 観月会, 茶話会, 卒業生送別会

出典:「創立七十年史」,「回想による110年史 鳥城」,「岡山朝日高等学校 教育史資料」より作成

表2は一中と二中の寄宿舎の比較をまとめたものである。一中の方は舎監に隠れて自習時間中にコンパを開いたり、夜食の買い出しを住み込みの賄いに頼んだり、比較的自由だったことが指摘される一方で、全学年が同じ部屋で生活するので室長が半名主と化し、イジメやリンチも行われていたという回想もある。

「(略)夕食は五時、それから六時半までは外出が自由であった。(中略)自習時間中にときどきコンパがある。もちろん舎監に見つかるとタイヘンであるからオンミツ行動であった。わずかの金を出しあつて菓子とかラムネをとる程度である」(奥田 毅(大正15年卒)前掲 1984, 40頁)

「寄宿舎にはヤケイ(夜刑?)ということが年二回ほどあった。多分四五年生でテニスコートの北側の石垣の東端あたりに、夜中に下級生の不都合者を呼出して説教したり、時にはなぐったりする。今夜はヤケイがあると何となくわかると寝ていても眠れない」(土井卓治(昭和6年卒)同上 50頁)

二中の方は、その教育方針に従って寄宿舎が設置された。これは初代校長武居が、ギリシヤ教育事情視察のさい見聞した伝統あるパブリック・スクールの全寮制度を参考にしたものである。二中の寄宿舎には「自誓」という生徒の心構えが存在し、一中に比べて管理的な傾向が強い反面、様々な行事があり(例えば、スキ焼き会、一日遠足等)、家族的でアットホーム一面もあった。また二中の方でも上級生の下級生に対する説教は行われていたという回想がある。

「起床・食事から、夜は自習・消灯まで時間の定まった団体生活であった。(中略)月に一度の「すき焼」は当時としては大変な御馳走であった」(I・I(昭和19年卒)岡山県第二岡山中学校第十九期会 1984, 40頁)

「寄宿舎では楽器などもハーモニカ以外の持込は禁止されていました。釣竿なども駄目でした。水難事故の予防の為でしょうか。その他にも駄目、駄目のものがありました。(中略)現在なら新聞沙汰になったかも知れない、集団で下級生を説教(リンチ?)して始末書を書いたこともありました」(F・M(昭和19年卒)同上 58-59頁)

その他寄宿舎生活での特徴的な記述としては、両校とも肉食、洋食の経験についての回想がある。一中の方は、以下のようなものがある。

「いわゆる洋食もでた。シチュー、ロールキャベツ、ライスカレーなどがあつた。紙のように薄いトンカツもあつた」(前出(大正15年卒)1984, 40頁)

「食堂でオムレツという献立があつたが、食べたことがなく初めはとてども食べられなかつた。ライスカレー

も同様、二年生の時チーズという語がでた。先生がチーズの説明をするのだが誰も知らない」(前出(昭和6年卒)同上 49頁)

二中の方も、一中と同様の回想がある。

「米飯を蒸気でたきあげるなど驚きであつたし、田舎で魚と野菜だけで育った自分が肉の味を知つたのもここでした」(S・S(昭和3年卒)前掲 1969, 227頁)

以上物質的な要素を検討すると、一中の学校文化は、角帽、七つボタンといった当時の中学では非常に珍しいものを採用し、他校との差異化を図るエリート的なものでありかつ学校側もエリートとして生徒を育てようとしていたことが伺える。寄宿舎についても二中に比べて比較的自由であつた。それに対し二中の学校文化は開校当初から一中を意識したものであり、生徒に対して管理的であり、質実剛健でスパルタ的なものを志向していたことが伺える。

2. 行動的要素について

〈修学旅行・遠足・臨海学校〉

表3 岡山一中と岡山二中の学校行事の比較

	修学旅行	遠足	臨海学校
岡山一中	旅行先(伊勢)での他校とのケンカと昭和初期の不況の影響で廃止	基本的には無し。1年のみ瀬海岸へ日帰り遠足	7月下旬の10日間、1年を対象に岡山県本島で民家に分泊
岡山二中	4年の春に九州、関西、朝鮮等に、昭和6年廃止	3年までは一日遠足として秋に近郊に、4年からは社会見学に	7月下旬の10日間、1年を中心に香川県小豆島で寺院に宿泊

出典:「創立七十年史」、「回想による110年史 鳥城」, 「岡山朝日高等学校 教育史資料」より作成

表3は一中と二中の修学旅行等の行事の比較をまとめたものである。ここで注目する点は、一中の回想の中に修学旅行や遠足がなかった、という記述がいくつか見られる点である。

「(*裏川校長の発言)「将来全国に雄飛する諸君に他校のような修学旅行は必要なし」と泊まりがけ旅行はなく、一年生の瀬海岸への日帰り遠足だけだった」(高木 篤(昭和9年4年修了)前掲 1984, 59頁)

「当時の中一には遠足も修学旅行もなく、校外へ出る機会は行軍(野外教練)のときぐらいのもの」(満田新一郎(昭和14年卒)同上 73頁)

「一中には修学旅行と寄宿舎がなかった(*筆者注、寄宿舎は昭和2年に廃止)。旅行の方は以前伊勢に行った時他校とわたりあったのでやめたとの事(略)」(大塚時雄(昭和15年卒)同上 75頁)

これに対して二中は、修学旅行系統案と一日遠足案が開校直後から制定され、その後何度か改正を経て、各学年毎に交通手段と目的地が決められている¹⁹⁾。

以上行動的な要素を検討すると、物質的な要素と同様に、一中の学校文化は他校に比べて差異が見られ、二中の学校文化は、学校の管理体制がきちりしているといえる。

3. 観念的要素について

観念的要素については、前回の報告で二中の資料を中心に、二中側からみた一中と二中の比較から、一中はエリート的、冷たい雰囲気、二中はスパルタ的、全人教育的(訓育的)、大らかな雰囲気の位置づけであることを明らかにした。今回の報告では、一中の側の資料を検討する。なお、一中の回想には二中についての記述がほとんど出てこないで、ここでは一中についてのみを取り上げる。

〈学校の教育方針〉

一中の学校の教育方針は、以下の回想からエリートを育てるものであり、世間もエリートとみなしていたということがわかる。また自由であったという記述も見られる。

一中生

「(略)入学早々に裏川校長から、イートンスクールの例を引きながら、「諸君は選ばれた者の自覚を持って。学校は諸君を紳士として遇する」という意味の訓辞を受けて、さすが一中だと自尊心を擽られた」(前出(昭和10年卒)前掲 1984, 59頁)。

「(略)当時の一中生は岡山市民から六高生とはまた違った意味でエリート扱いられていた」(大藤 眞(昭和10年4年修了)同上 62頁)

「岡山一中は、今日言うところの進学校で、それなりの矜持があり、比較的自由的な雰囲気です。授業時間も短く、午後一、二時間の授業が終わると帰っていったように思う」(I・T(昭和20年卒)前掲 1995, 52頁)

〈生徒の価値観・態度〉

前回の報告でも示したが、一中はエリート進学校だっ

たので進学や勉強に関する回想が多い。しかも特徴的なことは、自発的に良く勉強した、という回想が多いことである。

「教師がかれこれ言わないでも、生徒はよく勉強した。(中略)教師は所定の時間に授業するだけでよかった。扱いよい生徒だった」(前出(大正8~12年在職)前掲 1984, 36頁)

「生徒は放っておいてもよく自分で勉強した。寄宿舎ではわからぬところは友達や上級生に教えてもらえた。上級生を見まねて自然に勉強が身についた」(前出(昭和6年卒)同上 51頁)

「(略)岡山一中は都会的な学校で、よくいえばレベル、わるくいえば各自受験勉強に熱中していて、昼休みでさえ参考書を開いている者がいるのには驚いた」(T・A(昭和20年卒)前掲 1995, 97頁)

以上観念的な要素を一中について検討すると、一中の学校文化は、エリート的で自発的に勉強する雰囲気があることがわかる。これは前回の二中側からの分析の結果から示したものとほぼ等しいもので、管理的かつ全人教育を志向した二中とは異なるものである。

V. まとめ

以上分析結果をまとめると、今回の分析においても、二中の学校文化は、学校の管理が強くスパルタ的な部分が強いもので、一中の生徒の自主的な傾向が強く、エリート的な学校文化とは対照的であると言える。

前回の分析において課題となった、二中の学校文化の管理的な部分と大らかで家族的な部分の共存については、今回の分析においても明らかにすることはできなかった。次回の分析では、新たな方法を用いてこの課題に迫りたい。

【注】

- 1) 小林完治(昭和34年卒)岡山県立岡山朝日高等学校 1984, 134頁。
- 2) 創立七十年史編集委員会 1969, 619頁。
- 3) 岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 2000, 1-4頁。
- 4) 創立百年史編集委員会 1999, 91頁。
- 5) 日本教育社会学会編 1986, 『新教育社会学会辞典』東洋館出版社 117-118頁。
- 6) 後神によると、戦前角帽が目立つ中学は福岡県の豊津中学と岡山県の岡山中学(後の岡山一中)であっ

たという(後神俊文 1988, 12頁), また岐阜県尋常
中学, 鳥取県尋常中学, 香川県尋常中学でも一時
期角帽を採用したが長くは続かなかったという
(同上1999, 「『自主自立』の源流—校友会活動」『烏
城』第156号 岡山県立岡山朝日高等学校 29頁)。
なお豊津中学の学校史にも角帽が憧れの的であっ
たという記述が見られる(福岡県豊津中学校 1937,
120頁)。

7) 同上 1988, 12頁。

8) 同上 1999, 前掲論文, 29頁。

9) 「天下の三中」が具体的にどの学校を指すのかはわ
からない。しかし、恐らく同校が校友会誌に示し
た高等学校入学者上位校かつ戦前の欧文社(現在の
旺文社の前身)の雑誌『受験旬報』の上級学校進学
状況全国中学ランキング上位校の東京一中, 東京
四中, 神戸一中, 京都一中と岡山一中等が該当す
ると思われる。

10) 後神俊文 1988, 前掲書, 13頁。

11) 太宰施門(明治40年卒)前掲 1984, 25頁, 岡山県立
岡山朝日高等学校同窓資料室 1980. 9, 『岡山朝日
高等学校 教育史資料』第8集 23頁。

12) 亀山相次(大正8~12年在職)同上 1984, 36頁。

13) 森藤靖夫(昭和4年卒)同上 44頁。

14) 大藤 眞(昭和10年4年修了)同上 62頁。

15) Y・K(昭和3年卒)前掲 1969, 236頁。

16) 新井正男(旧職員)前掲 1950, 40頁。

17) M・A(昭和4年卒)前掲 1969, 238頁。

18) O・M(昭和5年卒)同上 289頁。

19) 同上 220-221頁。

【分析資料以外の参考文献・資料】

①秋山和夫 1972, 『岡山文庫48 岡山の教育』日本文
教出版社。

②黄 順姫 1998, 『日本のエリート高校—学校文化と
同窓会の社会史—』世界思想社。

③福岡県豊津中学校 1937, 『豊津中学校史』。

【付記】

本研究に関しては、岡山二中・岡山操山高等学校関
係者、岡山一中・岡山朝日高等学校関係者の皆様に大
変お世話になった。記して謝意を表したい。